

# 「崇高」の概念と「風景の発見」について

石川 美子

旅先で目にした山や海の風景の美しさに感動して手記などに書きとめる、というのは、17世紀前半まではほとんど見られないことであった。山や海は自然の脅威や危険が大きく、恐ろしい場所にすぎなかったからである。とくに高い山々は、大地の醜くてじゃまな突起物として嫌悪されていた。1611年にイギリスの詩人ジョン・ダンは、山のことを「地球の顔のイボか、あばたか<sup>1</sup>」と詩によみ、グランドツアー（ヨーロッパ大陸見聞旅行）でシンプロン峠をこえたジョン・イーヴリンは「地球中のごみをアルプスに掃きよせたかのようだ<sup>2</sup>」と1646年の日記に書いた。

だが17世紀末になると、アルプスの峰々をみて恐怖や嫌悪感だけでなく恍惚感にも似た喜びをかんじる旅人たちがあらわれる。たとえばジョン・デニスは、グランドツアーで1688年にアルプス山中を旅したとき、「喜びをあたえる恐怖、恐るべき歓喜<sup>3</sup>」を感じたと記している。そして18世紀に入ると、荒々しい山や海が感動をあたえる光景として賛美されるようになる。そのような景観を見ようと、ヨーロッパじゅうから観光客が集まった。1770年ごろから、スイス・フランスの山岳地帯への旅は流行となる。たとえば1784年に、当時ローザンヌに滞在していたイギリスの歴史家エドワード・ギボンに、母親に宛てた手紙のなかで「スイス旅行、アルプス、氷河は流行になっています<sup>4</sup>」と書いている。

作家たちもアルプスへ向かった。イギリスやフランス、ドイツの数多くの作家がアルプスをおとずれて、旅の印象を書きのこした。シャトーブリアンもそのひとりだった。彼は1805年夏にシャモニーをおとずれて、氷河やモンブランをながめ、1806年2月に『モンブラン紀行』を発表する。

だがこの旅行記は、山の風景を賛美するものではなかった。それどころかアルプス旅行の流行を批判する文章だったのである。批判は三つの点からな

---

<sup>1</sup> John Donne, *An Anatomy of the World*, « The First Anniversary » (ll. 300-301), London, Samuel Macham, 1611.

<sup>2</sup> *The Diary of John Evelyn*, vol.1, edited by William Bray, New York & London, M. Walter Dunne Publisher, 1901, p. 228. 日記は1646年5月のものである。

<sup>3</sup> John Dennis, *Miscellanies in Verse and Prose*, London, James Knapton, 1693, p. 134.

<sup>4</sup> *The Life and letters of Edward Gibbon*, London & New York, F. Warne & CO., 1889, p. 319.

っていた。まず、美しい風景を見るために山岳地方に入りこむのは間違っているということ。つぎに、山々を「崇高」「崇高性」と表現するのは正しくないこと。そして、ルソーの語る山の良い効果などは信用できないということであった<sup>5</sup>。シャトブリアンのこうした批判から、風景をめぐる 1800 年ごろの一般的な状況がわかる。人びとはルソーの本に導かれるようにしてアルプスへ向かい、高い山々を「崇高」という言葉で称賛していたのである。

### 1) 「崇高」という語について

フランスにおいて、「sublime」の語は形容詞として 15 世紀ごろから用いられており、気高い、卓越した、高度な、などの意味をもっていた。たとえば 17 世紀後半に、パスカルは「神の本性に与るまで高められた」状態を「このような崇高な状態」と表現しているし、モリエールは皮肉をこめて「崇高な学問の光明」といった言いかたをしている<sup>6</sup>。しかしそのころから、「崇高な」という形容詞は修辞学にかんしても用いられるようになる。1671 年のブウール神父の『アリストとウジェーヌの対話』のなかに、「崇高な文体<sup>7</sup>」という表現を見ることができる。

そして 1674 年に、ボワローがロンギノスの『崇高論』のフランス語訳を出版する。ボワローは序文のなかで、「崇高 (Sublime)」とは読者に衝撃をあたえて魅了する「並はずれたもの、驚くべきもの」であり、「言説における驚異的なもの」であると定義した<sup>8</sup>。このとき、名詞としての「sublime」が生まれたと言ってよいだろう。

ボワロー訳の『崇高論』はただちに広まった。そして 1680 年刊行のリシュレの『フランス語辞典』にさっそく取り入れられて、名詞の「sublime」の定義として、「修辞学用語。それはもっとも高尚な文体であり、もっとも上品で、もっとも荘重で、もっとも生き生きとした文体である<sup>9</sup>」と、ロンギノスとボワローの名とともに記されたのである。

---

<sup>5</sup> Chateaubriand, *Voyage au Mont-Blanc et réflexions sur les paysages de montagnes* (1806), Rezé, Séquences, 1994.

<sup>6</sup> パスカルは『パンセ』の「写本」の 208 番 (ブランシュヴィック版の 435 番) からの引用であり、モリエールは『女学者』の第 3 幕第 2 場からである。

<sup>7</sup> Dominique Bouhours, *Les Entretien d'Ariste et d'Eugène*, S. Mabre-Cramoisy, 1671, p. 73.

<sup>8</sup> Nicolas Boileau, « Préface » du *Traité du sublime ou du merveilleux dans le discours* (traduit du grec de Longin), *Œuvres diverses du sieur D\*\*\**, D. Thierry, 1674.

<sup>9</sup> *Dictionnaire français, contenant les mots et les choses*, par P. Richelet, Genève, chez Jean Herman Widerhold, 1680.

1694年の『アカデミー・フランセーズ辞典』初版においても、形容詞の意味のあとに「**SUBLIME** は名詞としても用いられる<sup>10</sup>」と書かれ、ロンギノスの名があげられている。『アカデミー・フランセーズ辞典』は、初版から第5版（1798年）まで、文例や説明文が多少ふえているものの、形容詞の意味と、ロンギノスに依る名詞の意味、という定義ではほとんど変わっていない。

1771年には『トレヴー辞典』の第6版が出る。説明が詳しくなっているとはいえ、リシュレやアカデミー・フランセーズの辞典と基本的にはおなじであり、一般的な形容詞の意味と、ロンギノスによる名詞としての意味が記されている<sup>11</sup>。特徴的な点としては、名詞の意味のあとにボワローの「**sublime**」の意味が非常に詳しく説明されていることであろう。

このようにフランス語辞典にかんするかぎり、18世紀後半まで、「**sublime**」は形容詞としての一般的な意味と、修辞学にかかわる名詞としての意味しかもっていなかった。「崇高」という名詞が風景の描写にかんして用いられた文例は見あたらない。

1674年のボワロー訳の『崇高論』は、すぐにイギリスにも伝わっていた。イギリスの教養人や名家の子弟たちは、フランス語によってロンギノスを知り、関心をもったのである<sup>12</sup>。そして英語においても、「**sublime**」という語は、高尚な、高度な、という意味の形容詞と、そのうえに修辞学的な「崇高」という名詞も持つようになる。1755年刊行のサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』をみると、「**sublime**」はふたつの項目からなっており、ひとつめに形容詞としての意味、ふたつめに名詞の意味が記されている。名詞の項目はこうである<sup>13</sup>。

偉大な、あるいは高尚な文体。The *sublime* はフランス語表現であるが、現在は英語に取り入れられている。

ロンギノスは彼の詩法すべてをさらに強化しており、そしてロンギノス自身が彼の描く偉大なる「**sublime**」なのだ。（ポープ）

---

<sup>10</sup> *Le Dictionnaire de l'Académie française*, t. 2, J. B. Coignard, 1694.

<sup>11</sup> *Dictionnaire universel français et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, t. 7, La Compagnie des libraires associés, 1771.

<sup>12</sup> それ以前にも、1652年刊行のジョン・ホールによるロンギノスの英訳などがあったが、イギリスでロンギノスへの関心が生じたのはやはりボワローの仏訳によってであった。その後、1739年にウィリアム・スミスによる英訳が出され、版を重ねることになる。

<sup>13</sup> *A Dictionary of the English Language*, Samuel Johnson, London, J. and P. Knapton, 1755.

「sublime」は、高貴な思考、壮大な言葉、あるいは調和のとれた鮮烈な性質の文から生じる。完全な「sublime」は、この3つすべてが合わさったときに現れる。(アディソン)

ポーブの引用は『批評についての試論』（1711年）からであり、アディソンの引用は『ガーディアン』紙（1713年7月25日号）からである。ポーブもアディソンもボワローとロンギノスを称賛したことで知られていた。

とはいえ、アディソンは1699年から1703年までグランドツアーをおこなった人である。彼はアルプスについて「快い恐怖のようなもの<sup>14</sup>」を感じたと語っていた。しかし山の風景を語るときに「崇高」の語をもちいることはなかった。彼にとって「崇高」は修辞学のための用語だったのである。

一般的には、グランドツアーの人たちがアルプスで体験した感覚が、ボワローの紹介した「崇高」の語と結びつき、畏怖をともなったイギリス的「崇高」の概念が生まれた、とよく言われる。しかし実際には、ジョンソンの辞典も示しているように、イギリスでは1755年においても「sublime」は、「崇高な」という一般的な形容詞と、修辞学用語としての「崇高」という名詞しか持たなかったのである。フランスとおなじように。

## 2) フランスにおける「崇高」

ロンギノスは『崇高論』のなかで「崇高」のための5つの要素<sup>15</sup>をあげているが、そのなかに畏怖や恐怖の感情に結びつくものは見あたらない。しかし、「崇高」の文例として恐ろしい場面の表現が引用されている箇所がないわけではない。たとえばホメロスの描いた神々の争いの場面について、ロンギノスはつぎのように述べている。まず、1737年にイギリスで出された、ウィリアム・スミスによる英訳によるところである。

これらの大胆な表現は、寓意的に理解されなければ、まったくの冒流であり、あまりにも不快なものになってしまう<sup>16</sup>。

---

<sup>14</sup> Joseph Addison, *Remarks on several parts of Italy, & c. in the Years 1701, 1702, 1703*, London, J. Tonson, 1718, p. 350.

<sup>15</sup> 精神の高揚、激情、凝った文彩、表現の高貴さ、壮麗と威厳をもった言葉の構成と配置、の5つである。

<sup>16</sup> Dionysius Longinus, *On the Sublime, translated from the Greek with notes and observations, and Some Account of the Life, Writings, and Character of the Author.* by William Smith

1674年のボワロー訳ではこうなっていた。

これらの内容すべては、寓意的な意味に解されねばならない。さもなければ、  
いわく言いがたく恐ろしくて不敬なもの、神々の尊厳にほとんどふさわしくないものとなってしまう<sup>17</sup>。

ふたつの訳を比較すると、ボワローは「恐ろしくて」の語をくわえて訳しており、このことから彼が「恐ろしい」ものを否定的にとらえていたことがわかる。実際に、ボワローによる翻訳にも序文にも、畏怖を「崇高」と結びつける箇所は見あたらない。ボワローにとって「崇高」とは、「言説のなかで人を感動させ、ひとつの作品が人を夢中にさせ、魅了し、興奮させる」ものであり、風景への畏怖とはまったく関係のないものだったのである。

1687年に、ボワローとシャルル・ペローのあいだで新旧論争が起こる。ボワローは古代派であり、『崇高論』ではホメロスを称賛していたこともあり、新旧論争は「崇高」をめぐる論争にもなった。近代派は、はじめは「崇高」の概念に否定的であった。だが1707年にラ・モットは詩論のなかで述べる。

「崇高」とは、偉大なる思考のなかに集められ、優雅さと正確さによって表現された、真実と新しさ以外の何ものでもない、とわたしは思う<sup>18</sup>。

「優雅さ」や「新しさ」という言葉をくわえることによって、ラ・モットは「崇高」の概念を換骨奪胎し、近代派の側に引き寄せてしまったのである。

ラ・モットは1713年に近代派らしくホメロス批判をして、ギリシア学者ダシエ夫人を相手に新旧論争を展開する。そして1715年の『批評についての考察』では、「崇高」を近代派の言葉として自在にもちいて論争したのだ<sup>19</sup>。

1726年から1728年にかけて、シャルル・ロランが修辞学教科書『文芸を教え学ぶ方法について』を出す。その第2巻には、当然のごとく「崇高なジャンルについて」という小章<sup>20</sup>がおかれている。ロランはまずラ・モットと

---

(1737), London, B. Dob, 1743, p. 21.

<sup>17</sup> Boileau, *op.cit.*, p. 20.

<sup>18</sup> *Odes de Mr. de La Motte. avec un discours sur la poésie en général, & sur l'Ode en particulier.*, Amsterdam, Louis Renard, 1707, pp.XLVI-XLVII.

<sup>19</sup> Antoine Houdar de La Motte, *Réflexions sur la critique*, Du Puis, 1715.

<sup>20</sup> Charles Rollin, *De la manière d'enseigner ou d'étudier les belles-lettres* (1726-1728), t. 2, Chez Barroi aîné, Chez Savoye, Chez P. T. Barroi le jeune, 1785, pp. 87-100.

ボワローの主張を引用し、そのあとで自説を展開してゆく。この修辞学教科書は版をかさね、19世紀には『教育概論』という書名でさらに版をかさねる。

1765年には、『百科全書』第15巻が出版される<sup>21</sup>。項目「崇高」の執筆を担当したのはジョクールである。ジョクールは、まずボワローによる「崇高」の定義をあげ、つぎにシルヴァンの定義を引用し、それから自分の考えを述べてゆく。5ページ近くにおよぶ記述のなかでボワローの名は二度しか出てこないが、ジョクールはボワローの考えをほぼ踏襲している。こうして、ジョクールが執筆した「崇高」の項目により、古代派と近代派の区別を超えた修辞学的概念である「崇高」が確認されたのである。

このときすでにイギリスでは、エドモンド・バークの『崇高と美の観念の起源』（1757年）が出版されていた。1765年にはデ・フランセ神父によるフランス語訳『美と崇高の観念の起源についての哲学的研究』も出されて<sup>22</sup>、畏怖をともなった「崇高」がディドロらに影響をあたえはじめていた。だが『百科全書』にとっての「崇高」は修辞学的概念にとどまっていたのである。

18世紀末のフランスにおける「崇高」の状況を知るうえで興味ぶかい小説がある。1792年に出された、フロリアンの短編小説「クロディーヌ、サヴォア地方の話」である。アルプスへの旅が流行していた1788年に、フロリアン自身もシャモニーへ旅をし、シャモニーを舞台とした小説を書いたのだった。アカデミー・フランセーズ会員に選ばれたばかりのフロリアンが書いた「クロディーヌ」は通俗小説そのものだった。しかし通俗小説というのは、当時の流行や一般的な社会状況を反映しているものである。

まず小説の構造がそうだった。フロリアンが、シャモニーの山岳ガイドのパカールから、村娘クロディーヌの数奇な物語を聞き、それを書きとめるという形式をとっており、これは18世紀に流行した聞き語りの小説手法である。パカールという名前も、1786年にモンブランに初登頂した人の姓であった。

山の岩々や氷河をみてフロリアンが恐怖を感じる場面があるが、それはあらゆるアルプス紀行で語られたおなじみの印象だ。山を下って彼が目にした心地よい光景は、川のせせらぎ、緑のじゅうたん、花とりどりの草原、わらぶきの家など、陳腐そのものである。こうした山の風景を描きながらも、フ

---

<sup>21</sup> *Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. XV, Neufchâtel, Samuel Faulche, 1765.

<sup>22</sup> Edmund Burke, *Recherches philosophiques sur l'origine des idées que nous avons du beau & du sublime*, 2 vols, traduites par l'Abbé Des Français, Londres et Paris, Hochereau, 1765.

ロリアンは「崇高」という言葉をまったく用いることがなかった。彼にとって、山の風景と「崇高」は結びついていなかったのである。

ただし、小説のなかで一度だけ、彼が「崇高な」という形容詞を用いた箇所がある。ジュネーヴからシャモニーへの旅路について語ったところである。

わたしは、この旅路について描写するつもりはまったくない。興味をもってもらえるように書くには、あの熱狂的で、崇高で、凡人には理解できない文体を模倣しなければならないだろうからである<sup>23</sup>。

18世紀末にアカデミー・フランセーズ会員であったフロリアンにとっては、「クロディーヌ」という山を舞台とした小説においてであろうとも、「崇高な」という言葉はあくまで文体や修辞学のためのものにすぎず、山の風景描写とはかかわりのないものだったのである。

### 3) グランドツアーと「崇高」

イングランドには高い山はなく、最高峰ですら 978 メートルにすぎない。そんな国で育った若者がグランドツアーでアルプスをおとずれ、はじめて 4000 メートル以上の山々を見たときに、どれほど驚き恐れたことだろうか。グランドツアーの初期の旅人たちにとっては、山々は、神の創った世界における大きな廃墟のように思われたのだった。神学者で地質学者のトマス・バーネットは、1671 年にアルプスをおとずれて、つぎのように書いている。

あらゆる方向を見ても、たくさんの巨大な物体がみな無秩序に投げ出されているというのが、これらの山々なのだ。[...] 異様に荒れ果てて、廃墟のような、それまで考えていたのとは全く異なる地域が地球にはあるのだ [...] <sup>24</sup>。

1688 年にアルプスを見たジョン・デニスはこう書いた。

これらの山々が、神の創造世界ではなく、世界の崩壊によってできたのだとしたら [...]、これらの古い世界の廃墟は、新しい世界の最大の驚異である。巨大であるだけでなく、恐ろしく、醜く、ぞっとする廃墟なのだ<sup>25</sup>。

---

<sup>23</sup> Jean-Pierre Claris de Florian, « Claudine, nouvelle savoyarde », *Nouvelles nouvelles*, L'Imprimerie de Didot l'aîné, 1792, p. 95.

<sup>24</sup> Thomas Burnet, *The Sacred Theory of the Earth*, Book 1 (1684), London, R. N., 1697, p. 96.

デニス、この醜い廃墟を見ながら、しかし同時に「喜びをあたえる恐怖」も感じたと書いている。1699年にグランドツアーに出たジョゼフ・アディソンも、アルプスを見て「世界でもっとも不均整で不格好な光景」だと思いつつ、それが「快い恐怖のようなもの」を生じさせるとも記している<sup>26</sup>。

しかしデニスもアディソンも、そうした醜い山々を語るときに「崇高」の言葉を用いることはけっしてなかった。ふたりには古典の教養があり、「崇高」といえばロンギノスの「崇高」にほかならなかったのである。デニスは1704年に『詩批評の基礎』を刊行し、そのなかで「崇高」と恐怖について論じているが、それはロンギノスをめぐる詩論にすぎず、アルプスの風景とはまったくかかわりのないものだった<sup>27</sup>。アディソンは、みずから創刊した新聞『スペクテイター』のなかで、山の風景の喜びについて1712年の記事で述べているが、やはり「崇高」の言葉を用いることはなかった。逆に、ホメロス、ヘシオドス、ロンギノスといった古典について語るときには、惜しみなく「崇高」を用いたのだった<sup>28</sup>。

1739年には、ホレス・ウォルポールがグランドツアーに出る。このころになると、旅人たちはアルプスで恐怖をあげようことを期待するようになっていた。サルヴァトーレ・ローザの絵画で見知った岩山や洞窟の恐ろしい風景を心待ちにしていたのである。だからウォルポールは、アルプスをおとずれるとすぐに友人に手紙を書く。手紙はつぎの文ではじまっていた。

断崖、山々、急流、狼、サルヴァトーレ・ローザ<sup>29</sup>。

ウォルポールは、山でさまざまな危険に直面し、恐怖をあげた。だが同時に、ローザの絵で期待していたものを自分の目でひとつひとつ確認し、そのことに満足もしていた。しかし彼がアルプス地方から送った手紙にも、やはり「崇高」という言葉はまったく用いられていない。

ウォルポールは帰国すると屋敷を購入し、それを中世の廃墟ふうの建物に改築して、イタリアで買い集めた絵画を展示して友人たちに見せたという。

---

<sup>25</sup> John Dennis, *op. cit.*, p. 139.

<sup>26</sup> Addison, *op. cit.*, p. 350.

<sup>27</sup> John Dennis, *The Grounds of Criticism in Poetry*, London, Geo. Strahan & Bernard Lintott, 1704, pp. 85-87.

<sup>28</sup> *The Works of Joseph Addison : The Spectator*, n° 315-635 (1711-1714), New York, Harper & Brothers, 1837.

<sup>29</sup> *The Letters of Horace Walpole*, vol.1 (1735-1745), edited by Peter Cunningham, London, Richard Bentley, 1891, p. 26.



前世紀からグランドツアーの旅人たちがアルプスで感じていた「世界の廃墟」を自分の屋敷なのかに再現したのである。

さらにウォルポールは、山であじわった恐怖を読者にあたえるような小説を書きたいと考えて、1764年にゴシック小説『オトランド城』を発表する。物語の冒頭で、巨大な兜が上から落ちてきて人を圧死させる場面があるが、それには、崖から大岩が落ちてくる危険な山道の光景を重ねあわせることができるだろう。とはいえ、この小説にも「崇高」という言葉はまったく使われていない。山での恐怖を再現する小説であるにもかかわらず、しかも小説刊行の7年前の1757年にはエドモンド・バークが『崇高と美の観念の起源』を出版していたにもかかわらず、である。

#### 4) バークの「崇高」の影響

バークの崇高論は、「崇高」と「美」を対立するものとして論じている。「崇高」は、「偉大なもの」と言いかえられたりもする。

崇高なものは容積が巨大だが、美しいものは比較的小さい。美は滑らかで磨かれているが、偉大なものはごつごつして飾り気がない。美は直線避けるが、それとわからないように避けている。偉大なものはたいてい直線を好み、直線を逸脱するときは激しく逸脱する。美は黒ずんではならないが、偉大なものは暗くて陰鬱であらねばならない。美は明るくて繊細だが、偉大なものは堅固でどっしりしていなければならない<sup>30</sup>。

「崇高」と恐怖の関係については、つぎのように述べる。

何であれ、ともかくも苦痛や危険の意識を起こさせるもの、すなわち何であれ、ともかくも恐ろしいもの、恐るべき対象にかかわるもの、恐怖に似たように作用するものは、「崇高」の源であり、それゆえ精神が感じうるかぎりのもっとも強い感動を生み出すのである<sup>31</sup>。

しかしバークは、恐怖から生じる「崇高」について語るときにアルプスを例に出すことはなかった。山に言及すること自体がまれだった。わずかに、緑の草におおわれた山よりも、暗く陰鬱な山のほうが崇高であると述べたと

---

<sup>30</sup> Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*, London, R. and J. Dodsley, 1757, p. 115.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 13.

きと、平地の100ヤードの距離よりも100ヤード（約914メートル）の高さの山のほうが崇高の効果を生むと語ったときぐらいである<sup>32</sup>。このような低い山の例をあげていることから、バークがアルプスの山々を実際に見たことがなかったとわかる。それゆえだろうか、バークの理論は、グランドツアーでアルプスを旅した人たちに影響をあたえることはなかったのである。

バークの理論はむしろ、アルプスに足を運ぼうとしなかった思想家たちに影響をあたえた。『崇高と美の観念の起源』の刊行の7年後の1764年に、イマヌエル・カントは『美と崇高の感情に関する観察』を発表する。彼もまた「美」と「崇高」を対立的に論じており、その後、「崇高」は重要な概念としてドイツ哲学界に広まることになる。

1765年には、バークの『崇高と美の観念の起源』のフランス語訳が出版された。ディドロによるサロン評、とりわけジョゼフ・ヴェルネの絵画についての1767年の批評は、バークのつよい影響をうけている。ディドロが何年ごろにバークを読んだかはわからない。英語が堪能だったというから英語で読んだのかもしれない。いずれにせよ、「1763年のサロン」にはバークを読んだ形跡は見られないが、「1767年のサロン」には色濃い影響が見られる。そのなかでディドロはヴェルネの絵について、きわめてバーク的に語っている。

精神を驚かせるものすべて、恐怖の感情をあたえるものすべては、崇高へと導く。広大な平野は、海洋のように人を驚かさないし、静かな海は荒れた海のように驚かさない。暗さは恐怖を増大させる<sup>33</sup>。

ヴェルネの描く海は、嵐や難破の光景であった。ディドロがサロン評でヴェルネを称賛するまえから、ヴェルネの描いた嵐の海に魅せられた人は少なくなかった。たとえばマルモンテルは、1760年にトゥーロンの海岸をおとずれて、つぎのように書いている。

わたしの望みのひとつは海原を見ることだった。わたしは見た。だが静かな海だった。ヴェルネの絵が非常に正確に海を描いていたので、現実の海を見ても、いかなる感動もなかった<sup>34</sup>。

---

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.64 et pp. 51-52.

<sup>33</sup> *Œuvres complètes de Diderot*, t 11, Garnier Frères, 1876, p. 146.

<sup>34</sup> *Mémoires de Marmontel*, t 2, publiés avec préface, notes et tables par Maurice Tourneux,

ヴェルネの描いた海洋風景の人氣は続いた。1789年にベルナルダン・ド・サン=ピエールの『ポールとヴィルジニー』が単行本として出版されたとき、サン=ジェラン号が難破する場面にヴェルネの描いた版画が添えられたことも、当時のヴェルネの人氣をあらわしている。

そのようなヴェルネの絵画をディドロは「崇高」という言葉で称賛した。それまでのフランスにおいては、「崇高」の語は、15世紀から用いられていた形容詞の意味と、ボワローによる修辞学的価値をあらわす名詞しかなかった。ディドロははじめて芸術的な価値をしめす名詞として用いたのである。

そのことを名詞「崇高」の新たな意味の創出だと考えたのがエミール・リトレである。『リトレ辞典』を見ると、バークによる定義はまったく書かれていないが、名詞「sublime」の2番めの意味として、「美術用語。厳かな主題における非常に傑出した水準の美」という定義が記され、ディドロの「1767年のサロン」からの引用がなされている<sup>35</sup>。しかし、ディドロの「崇高」に注目したのはリトレだけだった。バークの理論がフランスでは根づかなかったように、ディドロの「崇高」もディドロのサロン評だけで終わってしまい、やがては一般的な形容詞としての意味のなかに吸収されてしまうのである。

イギリスのグランドツアーの旅人たちもバークの理論にはなじめなかった。それはバークが「崇高」と「美」を対立概念として定義したからであろう。アルプスをおとずれた旅人たちは、高い山々にたいして恐れや畏怖の感情をいだくと同時に、美の感動もあじわっていた。彼らは、「崇高」と「美」は対立するものではないと感じていたのである。

そのような思いを理論化したのがウィリアム・ギルピンである。彼は1782年に『ワイ川と南ウェールズの地域におけるピクチャレスク美の観察』<sup>36</sup>を出版し、「崇高」と「美」を対立させるだけでなく、調和もさせる概念として「ピクチャレスク」を提唱した。ギルピンは「ピクチャレスク」な風景をもとめてイギリス国内を旅してまわる。その結果、「ピクチャレスク」はイギリス的な風景への回帰という流行をもたらすことになった。

---

Genève, Slatkine Reprints, 1967, p. 179.

<sup>35</sup> Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Hachette, 1873-1874.

<sup>36</sup> William Gilpin, *Observations on the River Wye, and several parts of South Wales, etc.*, London, R. Blamire, 1782.

## 5) アルプス紀行を書いた人たち

イギリス人が国内旅行のほうに目を向けるようになったころ、グランドツアー自体も変化していた。それまでのようにイタリアを最終目的地とするのではなく、アルプスを目的とする旅行者がふえていたのである。そうしたイギリス人のなかに、歴史家ウィリアム・コックスや詩人ワーズワースたちがいた。彼らには共通点があった。ルソーの『新エロイズ』を愛読し、聖地のようにアルプスに憧れたのである。

書簡体小説『新エロイズ』は1761年に出版され、愛と美德のあいだで揺れる恋人たちの物語として人気を集め、おなじ年のあいだに英訳版も出された。読者はやがて作品中の風景描写に心ひかれるようになり、そのような山の景観を見ようとスイスやシャモニーの町をおとずれる人がふえてきた。

1775年にモンブラン登頂の最初の試みがなされたことも、アルプス旅行の流行を加速させた。登頂は失敗に終わったが、その後も何度も試みられ、ついに1786年に初登頂がなされる。モンブラン登頂に興味をもってシャモニーに来た人も、ルソー的な風景をもとめてアルプスをおとずれた人も、数多くの人が山岳紀行を書き残し、いっそうアルプスの人気をあおることになる。

そうした山岳紀行作家のなかで目をひいたのが、ジュネーヴの博物学者オラース＝ベネディクト・ド・ソシュールと、おなじくジュネーヴの画家マルク＝テオドール・ブーリであった。

ソシュールは、科学的な観点からモンブランに興味をもち、初登頂者には賞金を出すという掲示をだして、モンブラン登頂の流行をもたらした。彼自身も1787年に登頂し、そのときは頂上での沸点の実験などに数時間をついやしたという。ソシュールは数多くの山で調査登山をし、その成果を『アルプス紀行』全4巻（1779年～1796年）として出版した。『アルプス紀行』は、科学調査の記録でもあり、率直な旅行記でもあり、詩的な風景描写でもあった。たとえば夜の雪のながめの美しさに感動して、ソシュールはこう書く。

この美しい夕方のあとにきた夜をどのように描けばよいのだろう。黄昏のあと、空にただひとつ輝く月が、わたしたちの小屋をとりまく雪と岩の巨大な囲いに銀色の光の波を降らせていた。[...] 瞑想のための何という瞬間だろう。このような瞬間は、いかなる苦悩と喪失にも報いるのではないか。魂が高尚になり、精神の視野が広がるように思われる。この荘厳な静けさのただなかで、

人は自然の声を聞き、もっとも神秘的ないとなみを知る者になったように思われるのである<sup>37</sup>。

こうした風景描写によって『アルプス紀行』は評判になり、17年間にわたって、つぎつぎと新たな巻と重版が出されつづけた。シャトーブリアンも、「ソシュール氏の著作によって有名になったシャモニー谷をおとずれた<sup>38</sup>」と書いたほどである。しかしソシュールの『アルプス紀行』には、ルソーの名も、「崇高」という言葉も、いちども記されていない。

マルク＝テオドール・ブーリは、山の風景を描く画家であったが、モンブランに登頂したいという願望からシャモニーに滞在した。結局、登頂には成功しなかったが、アルプスについて書いた数多くのエッセーが評判になった。1773年に出版された『サヴォワ公国の氷穴と氷河と氷塊の描写<sup>39</sup>』は、2年後には英語訳も出され、さらに翌年には再版もされた。ブーリの本は現在ではほとんど読まれないことがないが、当時は山の風景を世間にひろめ、山への関心を高めることに大いに貢献した。ブーリは、よく似た内容の本をたくさん書き、おなじ内容の本を別のタイトルで出版したりもして、著作を量産した。ソシュールの『アルプス紀行』を模倣したこともあった。

ルソーからの引用もしばしば見られた。1781年刊の『アルプスの描写』（1783年の『氷谷と高山の新描写』）には、ルソーの文章が8ページにわたって引用されている<sup>40</sup>。『新エロイズ』第1部「書簡23」でサン＝ブルーが山の風景について語った箇所である。ブーリは、ルソーを引用することで自分の本の人気が高まると見込んでおり、事実、ブーリの本は評判になって、その結果、ルソーの文章もさらに広まるといふ効果があつた。

そうした評判に呼応するように、ブーリの文章のなかに「崇高」という言葉がすこしずつふえていった。ブーリはデュッフォンと親交があつたから、「崇高」の語をよく耳にしており、効果的な言葉として「崇高」を使つたのであろう。しかしブーリの「崇高」は、15世紀からある一般的な形容詞の意

---

<sup>37</sup> Horace-Bénédict de Saussure, *Voyages dans les Alpes* (1779-1796), Genève, Georg Éditeur, 2002, pp. 241-242.

<sup>38</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 23.

<sup>39</sup> Marc-Théodore Bourrit, *Description des glaciers, glaciers et amas de glace du Duché de Savoie*, Genève, Éd. Bonnant, 1773.

<sup>40</sup> Bourrit, *Description des Alpes Pennines et Rhétiennes*, t. 1, Éd. Bonnant, 1781, pp. 198-205 ; id., *Nouvelle description des vallées de glace et des hautes montagnes*, t. 1, Genève, P. Barde, 1783, pp. 198-205. ブーリのこの2著作は、タイトルは異なるが、内容はまったく同一である。

味にすぎなかった。ビュッフォンの修辭学的な「崇高」とも、バークやディドロの「崇高」ともかかわりがなかったのである。

1797年に、イギリスの歴史家ウィリアム・コックスの『スイスの自然と市民と政治の事情の素描』が出版され、イギリスで評判になる。ルソーへの言及と賛美があちこちに見られる本だった。「崇高な」という形容詞も用いられており、恐怖という言葉とともに使われている箇所もあったが、ほとんどが「偉大で崇高な情景」といった平凡な表現であった。「美しい、あるいは崇高な<sup>41</sup>」という表現もあることから、コックスがバークの「崇高」を考慮していなかったことがわかる。

ゲーテも、『新エロイーズ』に導かれて、アルプスをおとずれた。ゲーテは三度、スイスをおとずれているが、二度めの1779年の旅行のときには、ルソーが住んだサン=ピエール島をたずね、つぎに『新エロイーズ』ゆかりの町ヴヴェーをおとずれ、そのあとにシャモニーへ赴いている。だがゲーテも山の風景にたいして「崇高」の語をもちいることはなかった。

ルイ=セバスチアン・メルシエは、1781年にスイスへ亡命し、ヌシャテルで『タブロー・ド・パリ』を出版する。ルソーを尊敬し、『新エロイーズ』を愛読していたメルシエも、アルプスをおとずれる。そして1783年にアムステルダムで出した『タブロー・ド・パリ』新版には、「アルプスの眺望<sup>42</sup>」という章を最後につけくわえたのだった。とはいえメルシエも、アルプスの描写に「崇高」の語をもちいることはなかった。ルソーの弟子たちは、山の「風景」と「崇高」を結びつけて考える意識をもたなかったのである。

## 6) 「崇高」と「風景」

『新エロイーズ』のサン=ブルーの手紙は、読者たちを山へ誘ったという点で、つぎの4つの段落がもっとも重要である。

「書簡23」の第3段落で、サン=ブルーはまず「巨大な岩山」や「滝」や「急流」に驚嘆したことや、うっそうとした森で迷ったことを語る。そして、そのような野生の自然のなかにも人の手の営みが入りこんで、断崖絶壁にも

---

<sup>41</sup> William Coxe, *Sketches of the Natural, Civil, and Political State of Switzerland*, Dublin, The Booksellers, 1779, p. 85.

<sup>42</sup> Louis-Sébastien Mercier, *Tableau de Paris*, Nouvelle Édition, t. 8, Amsterdam, 1783, pp. 304-311.

畑が見えることに感嘆する。この段落によって、恐ろしい山の光景が、人の居住性や経済資源に結びついた近しいイメージに変化しているのである。

つぎの段落でサン=ブルーは、時間や光の効果によって微妙に変化する山々の美しさを描写する。そのつぎの段落では、山をどんどん登って、だれも行っただことのないような雲の上にまで至ったことを語っている。このふたつの段落は読者に、美しい山々を見てみたい、雲の上に行ってみてみたいという願望を起こさせたにちがいない。

さらに次の段落では、高い山の上では身体は軽やかになり、心は静かで穏やかになる、と語る。世俗的で卑しい感情は消え去って、魂は変わることのない純粋さをおびてくるのだ、と。この段落は、苦悩からの解放を山がもたらしてくれるとして、さまざまに悩み苦しむ読者たちを山へといざなった。

山の描写にかんしてルソーが「崇高」という言葉を用いることはなかったが、この4つめの段落でいちどだけ使っている。

そこ [高い山の上] では、わたしたちを感動させる対象に比例して、瞑想までもが何か偉大で崇高な性質をおびてきます。[...] そこでは、人間は厳粛であるが陰鬱ではなく、心静かであるが無気力ではなくなって、存在し思考することに満足するのです<sup>43</sup>。

ここでの「崇高」は、修辞学とも畏怖とも関係のない、一般的な形容詞の「崇高な」である。しかも、「崇高」であるとされているのは、山の風景ではない。瞑想の性質、心の状態である。さらに言えば、人間の存在であり、自分自身の存在である。アルプスの険しい山々を眼前にしたサン=ブルーが口にした「崇高」は、自然の「風景」への畏怖による言葉ではなく、自己の存在や内面を肯定するために発せられた言葉だったのである。

ゲートにしてもそうだった。1779年にスイスの山中で、岩壁に囲まれた道を通りながら、断崖を見上げたときの思いをつぎのように記している。

この隘路を通過しながら、わたしは大きな安らいだ印象を感じた。崇高さが魂に幸福な安らぎをあたえるのであり、そのことで魂は完全に充たされるので、自分をありうるかぎり偉大だと感じるのである<sup>44</sup>。

---

<sup>43</sup> Jean-Jacques Rousseau, *Lettres de deux amans, habitans d'une petite ville au pied des Alpes (Julie ou la Nouvelle Héloïse)*, t. 1, Amsterdam, M. M. Rey, 1761, pp. 122-123.

<sup>44</sup> *Goethe en Suisse et dans les Alpes : voyages de 1775, 1779 et 1797*, Genève, Georg Éditeur, 2003, p. 52.

ゲーテにも、山にたいする畏怖の感情は見られない。ここでの「崇高さ」は何をさしているのだろうか。山から感じとられる崇高さであるとしても、その崇高さは彼の魂のなかに入りこんでくるものである。ゲーテもまた、険しい山を目にして、自分の存在を肯定する意識をもったのだった。

セナンクールはルソーを精神的な師とあおぎ、亡きルソーを追い求めるようにして1789年にスイスに住みついた。スイスでの生活は、小説『オーベルマン』となって1804年に発表される。『オーベルマン』は、『新エロイーズ』とおなじように書簡体小説であり、小説のなかにはルソーに言及する手紙もあれば、従僕が『新エロイーズ』を読みはじめたことを語る手紙もある。主人公は、あるとき高い山に登ってゆき、万年雪のあるところまで到達する。

人のいないこの山の上では、空は果てしなく広大で、空気はより安定し、時間はよりゆるやかに、生はより永続的となる。[...]ここでは人間は、変化はするが壊れることのない自分の姿を見出す。世間の臭いからは遠ざかった自然のままの空気を吸いこむ。自分の存在は、自分のものであると同じく全世界のものでもある。人間は、崇高なる統一性における現実の生を生きるのである<sup>45</sup>。

ここでの「崇高」もやはり山の風景のことではなく、人間の精神、自分の存在にかかわるものである。

1790年のワーズワースの旅は、贅沢なグランドツアーではなかった。『新エロイーズ』を愛読する彼はアルプスを見るために旅に出たが、徒歩でフランスを横断してシャモニーに着いた。湖水地方で生まれ育った若者は、アルプスの威容に恐怖と重圧を感じ、圧倒され、鬱々とした気分さえなつた。

それから10年ほどして彼は自伝詩『序曲』を書きはじめ、そのなかでアルプス旅行について語る。モンブランをはじめて見たときの気持ちを、「かつてなく生き生きとしていた思考を占領してしまった無情な存在を目にして、悲嘆にくれた」と書く。アルプスのながめを期待して勇んでやってきた若者が圧倒されたさまを語っているが、じつはこれはルソーの文章をふまえてもいた。サン=プルーの「書簡 23」のなかに「もっとも生き生きとした情熱にたいして、もっとも無情な存在が支配することに感嘆した」という文があり、ワーズワースの文はこれに呼応している。サン=プルーの文は、のちの「崇高」な瞑想を準備している。ワーズワースもすこしあとに、「崇高な孤独のなかでは[...]瞑想の時を大いに甘美なものにする<sup>46</sup>」と書いている。これ

<sup>45</sup> Senancour, *Obermann* (1804), Gallimard, coll. « Folio », 1984, p. 95.

<sup>46</sup> William Wordsworth, *The Prelude, or growth of a poet's mind ; an autobiographical poem*,



が、彼がアルプス旅行のくだりで「崇高」の語を用いた唯一の箇所であった。瞑想を語るために一度だけ「崇高」を使うという点で、ワーズワースはまさにルソーに倣っているのである。

はじめは山々に圧倒されて鬱々としていたワーズワースも、やがて詩人としての想像力を取りもどし、想像力の無限性こそが人間の偉大さだと悟ることになる。そして1810年に『湖水地方案内』を出し、アルプスと湖水地方を比較して、「アルプスにおいては、静かな崇高さの感情を妨げない場所はほとんどない<sup>47</sup>」とまで語るようになる。彼にとっての「崇高」は、人間の尊厳にもとづいた静かな黙想に近いものでありつづけたのである。

山に登り、雄大な景色をながめていると、はじめは自己滅却のような感覚をあじわうが、やがてそれは自己確認の意識となってゆく。ゲーテにせよ、セナンクールやワーズワースにせよ、『新エロイズ』に導かれてアルプスをおとずれた作家たちは、山の「風景」を畏怖するのではなく、自分のなかに取りこもうとした。自分のまなざしで山の風景をながめ、自己の存在を肯定する意識をもち、自分の表現で山を語ろうとした。それゆえ「崇高」という言葉は、山の風景ではなく、自己の精神のほうに向けられたのだった。これらの作家たち全員が、自伝作品の作者であったことも偶然ではないだろう。彼らのアルプス旅行記は、つよい自意識の表現であり、自伝執筆の第一歩でもあったのである。

彼らは、「崇高」を自分の内面を語るための言葉として慎重に用いていた。しかし18世紀後半は、「崇高」という言葉が話題になっていた時代である。バークが、百科全書派が、ディドロが、山の風景とは関係のない「崇高」の語をもちいて執筆していた。他方で、ブーリやコックスのように安易に「崇高」の語をもちいてアルプス紀行を書く者があられ、その結果、山の「風景」と「崇高」とが結びついたと考えられるようになったのである。

シャトブリアンは、そうした誤解のなかで、山々を「崇高」「崇高性」と表現するのは正しくないと批判したのだった。彼は『モンブラン紀行』のなかでサン＝ブルーの「書簡 23」を引用しているが、そこには瞑想が「何か

---

(1805), London, Edward Moxon, 1850, p. 157 and p. 158. ワーズワースの最終稿にもとづいた『序曲』の初版は、1850年に、彼の死後になって出版された。

<sup>47</sup> William Wordsworth, *A Guide through the district of the lakes in the North of England* (1810), Kendal, Hudson and Nicholson, 1835, p. 96.

偉大で崇高な性質をおびる」と書かれていたことから、なおさらシャトーブリアンは、山の「崇高」とルソーとを結びつけて考えてしまったのであろう。

「書簡 23」を批判しながらシャトーブリアンは、人間の魂は空気や景観とは関係がないのだと語り、さらに次のように述べる。

そこが静かな場所だから、孤独な人間の魂に入りこんでくるのではない。それどころか、雷の鳴りわたる場所でも、魂は静けさを広げてゆくのである<sup>48</sup>。

彼は「風景」に左右されることのない自己の魂について語っている。結局、シャトーブリアンもまた、山の「風景」のなかで自分自身に目を向け、人間の存在の崇高さを意識したという点で、ゲーテやワーズワースといった作家たち、そしてルソー自身とおなじことを感じていたのである。

18 世紀にみられた「風景の発見」とは、「崇高」の概念をとおして山の景観をながめることではなかった。畏怖のまぎった感動という「崇高」から山をながめるのだとしたら、それはまだ「風景の発見」がなされたことにはならないだろう。もともと山は恐ろしい存在だったのだから。そうではなく、各人が自分のまなざしで風景をながめ、景観についての自分なりの解釈を生み出すようになったときにこそ、「風景」は誕生したと言えるだろう。自己の内面を直視し、人間の存在の「崇高さ」を感じとり、つよい自意識によって山の風景を語るようになったときに、である。つまり「風景の発見」とは、自己の探求の過程にほかならなかったのである。

---

<sup>48</sup> Chateaubriand, *op. cit.*, p. 56.